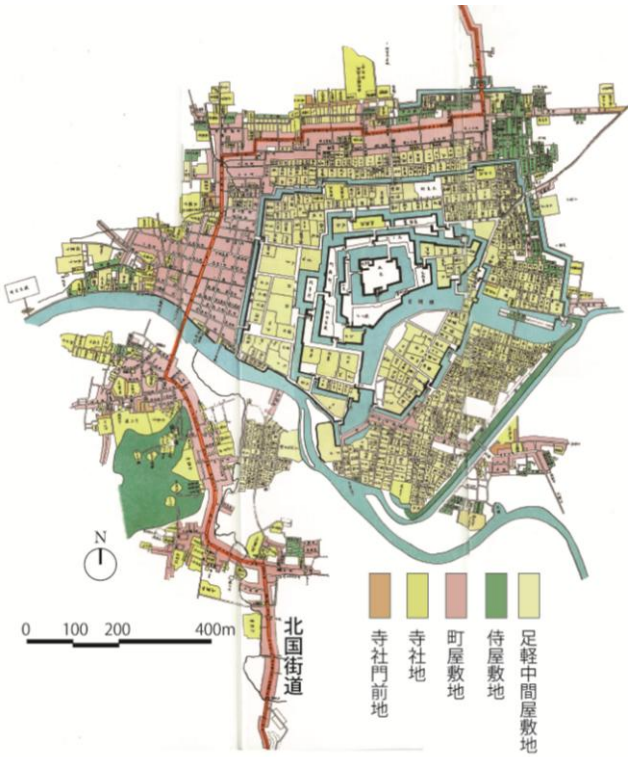
資料３

県都デザイン戦略　論点整理（参考資料）

◆県都のまちづくりの歴史



文化３年（1806 年）頃
（出典：福井城下町名ガイドブック）

1601 年の結城秀康の入国後に建設された城郭と城下町は、明治維新まで大きな変化なく過ぎた。

城下町の構成は、北国街道に沿って寺社地や町屋が配置されている。特に足羽山北東山麓には寺社が集中的に配置されており、現在もその名残が見られる。

外堀は現在の片町通りから養浩館北側、更に荒川、足羽川へと続いており、その中が武家地であった。

1850 年ごろの福井城下の人口は３万５千人くらいといわれる。

明治 27 年（1894 年）頃

明治 27 年までには、外堀の一部は埋め立てられたが、主要な道路形態はほとんど変化がない。

明治 29 年には北陸鉄道が開通し、福井駅が開業したが、駅前への交通が不便なため、以後、百間堀の南端の埋立てが進められた。

また、外堀に囲まれた旧上級武士居住地は、絹織物の家内工業地帯に変容した。

明治 22 年には全国の主要 39 都市とともに我が国で最初の市政が施行された。当時の人口は３万９千人で 17 位であった。

昭和 12 年（1937 年）頃

福井市の都市構造変革の契機は、1923 年の県庁の城内本丸跡への移転とその跡地活用であった。

県庁跡地と周辺には百貨店や商店が進出し、にぎやかな商店街へと一変した。これと前後して百間堀も埋め立てられ、市役所や郵便局、新聞社などが集中してビジネス街が誕生した。

交通機関でも、電車の乗り入れやバスの発着場が整備され、今日の都心の原形が整えられた。

昭和 30 年（1955 年）頃

戦災・震災からの復興事業は、戦前の都市計画を基本にしながら、区画整理をはじめ、街路の拡張整備、上下水道の改良、公園緑地の拡充なども進められた。

1969 年に戦災復興土地区画整理事業が完成し、1980 年の市街化区域内での区画整理済率は 63.9%と、全国の戦災都市の中でも、もっとも高い位置を占めていた。

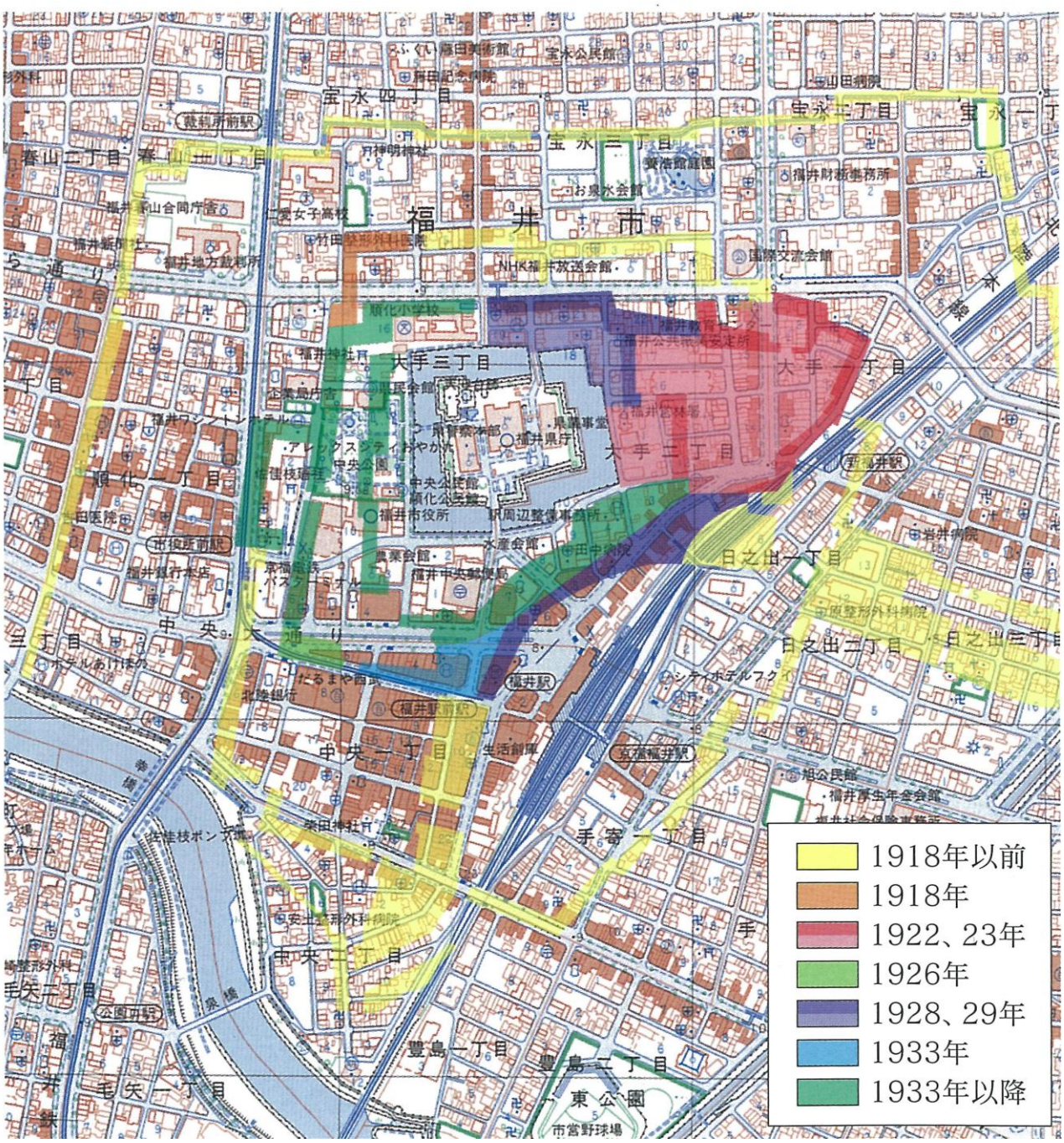
「福井市景観基本計画」
「福井県史　通史編」より

○お堀を埋めて形成された福井のまち

福井城址の中核部の埋立ては、県庁の本丸への移転と、越前松平試農場の転出が決まった 1919 年から本格化。

1928 年には県庁跡地にだるま屋百貨店が開店し、その後も百間堀を中心に堀の埋立てが進行。

1969 年に完成した戦災復興土地区画整理事業では、直線で広幅員のシンボルロードとして、中央大通りやフェニックス通りが整備された。

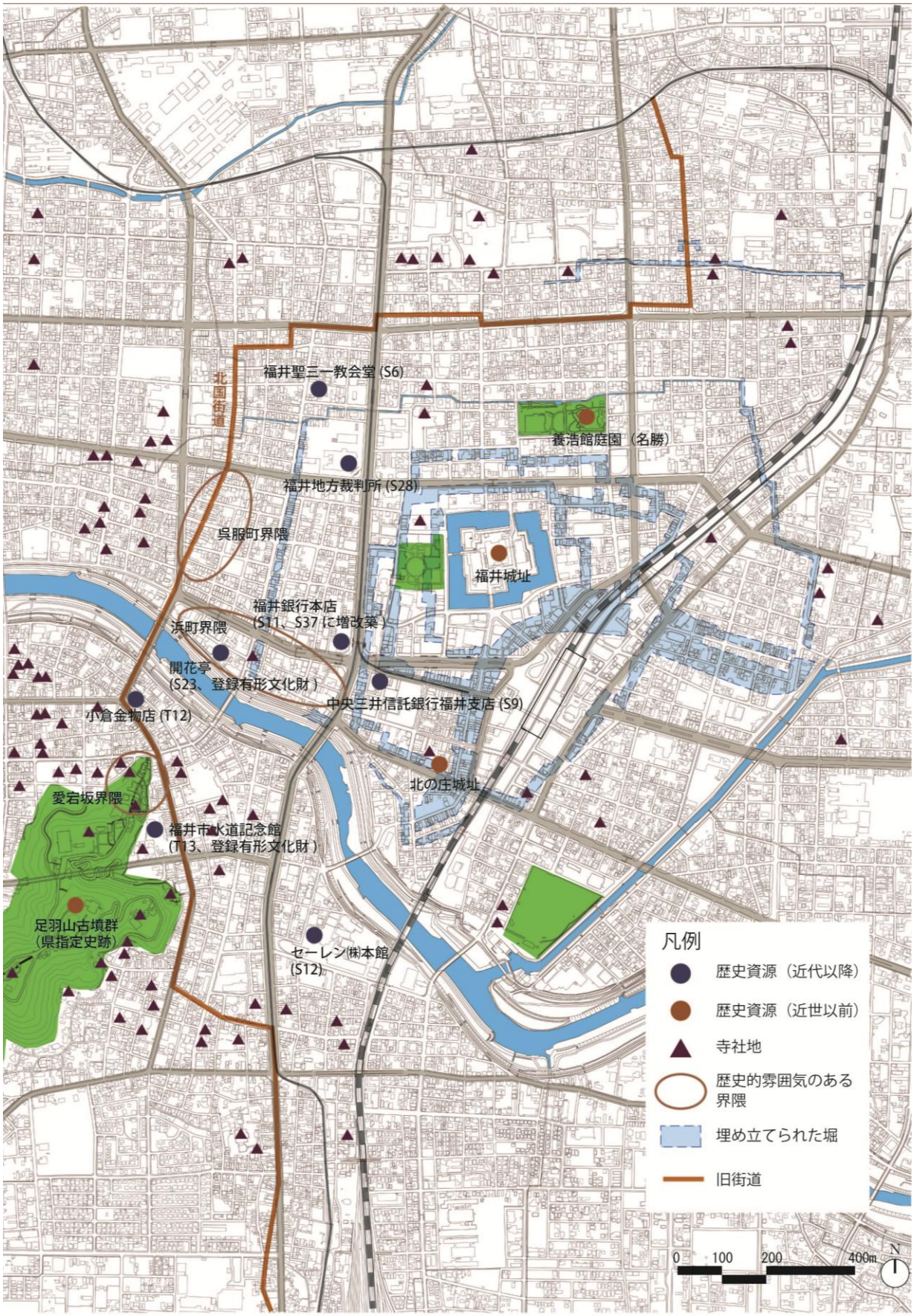


出典：図説　福井県史

◆県都の特徴と課題

（１）お堀を中心に点在する歴史資源

〇まちなかに点在する福井の歴史遺産



養浩館庭園　名勝

福井市水道記念館（T13）登録有形文化財

聖三一教会堂（S6）

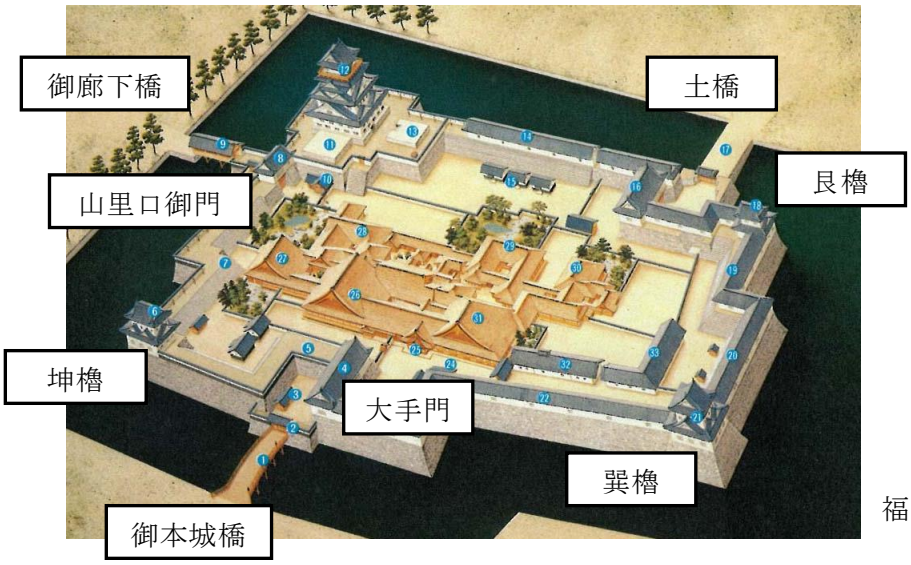
三井住友信託銀行福井支店（S9）

福井地方裁判所（S28）

戦災、震災から復興した現在の福井のまちには、近世の歴史資源は多くはない。

しかし、福井地方裁判所や三井住友信託銀行福井支店など、市民に親しまれるランドマークになっている建物もある。また、福井市水道記念館や福井聖三一教会堂など、まだまだ知られていない遺産がまちのなかに点在している。

○現存しない歴史遺産



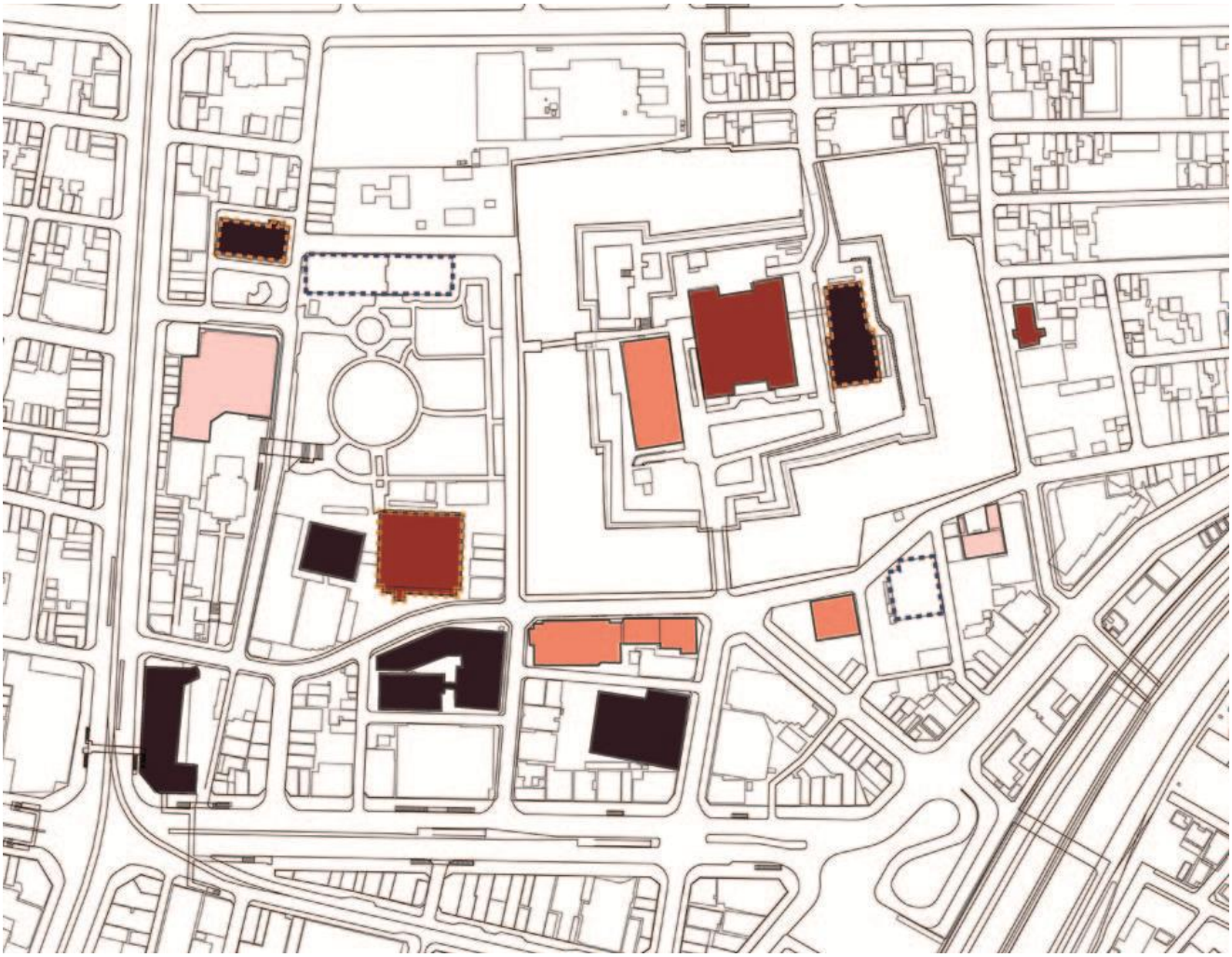
福井城

御座所

異人館

出典：復元大系　日本の城（ぎょうせい）
　　福井市郷土歴史博物館　福井の歴史アーカイブス

○建替時期を迎える城址周辺の建造物



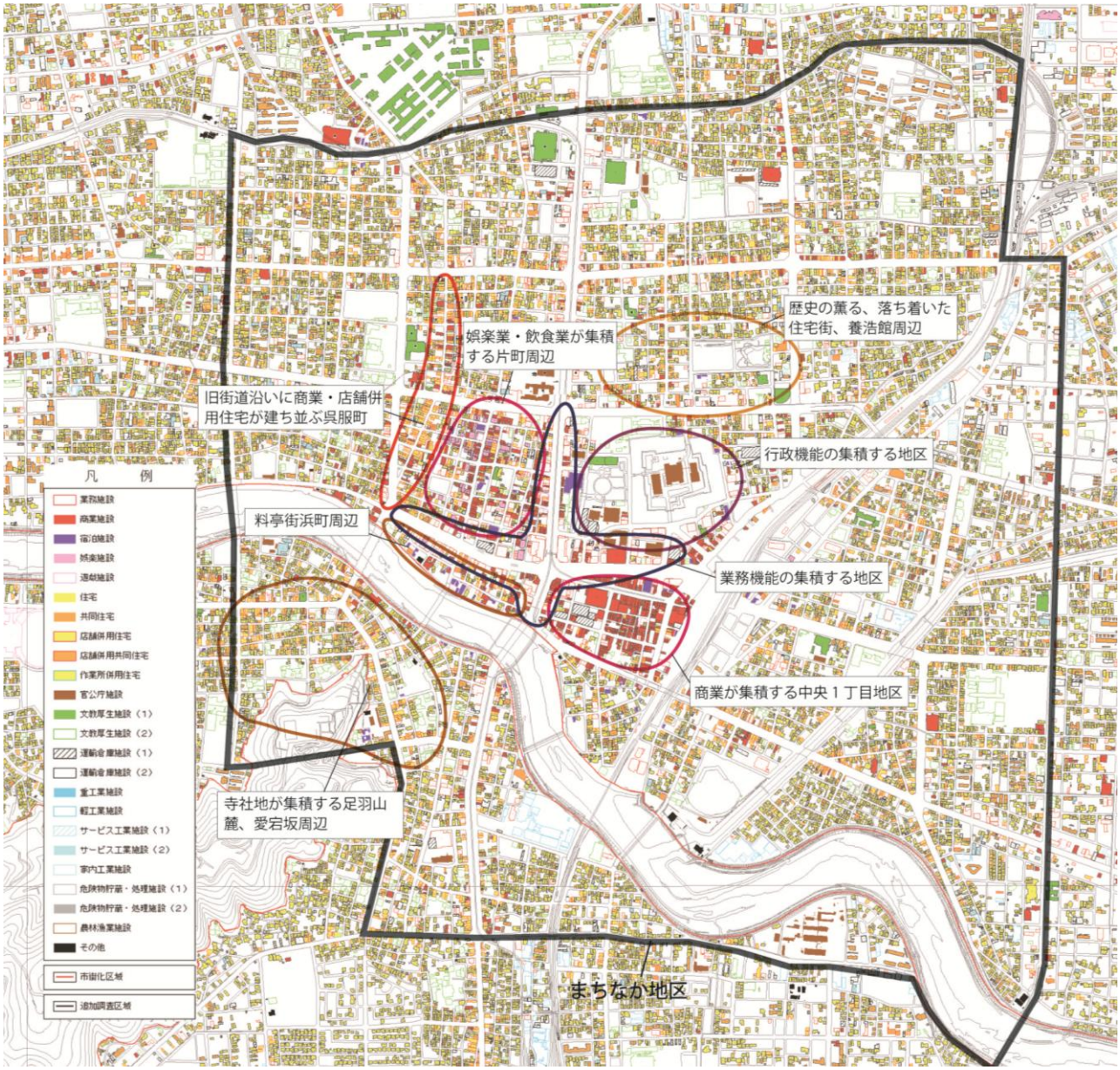
現在の中心市街地にある主要な業務ビルは、築 30 年の県庁舎、築 37 年の市役所本館を始め、築後 30 年を経過しているものが多くを占める。今後、こうした業務ビルの更新が進むと想定される。

凡例

- H4 以降 （築 20 年以下）
- S57 ～ H3（築 20 年～ 30 年）
- S47 ～ S56（築 30 年～ 40 年）
- S46 以前（築 40 年以上）
- 耐震改修済み
- H24 ～ H25 年度中に取り壊し

（２）コンパクトで豊かなインフラを持つ近代都市

○現在のまちなか地区の用途の状況



出典：福井都市計画基礎調査（H18）

現在のまちなか地区は、近世からの都市構造と戦災・震災復興以後の都市構造に分けられる。

近世からの構造としては、城下町の守りとして足羽山麓に集積された寺社群、北国街道沿いに発達した片町や浜町、呉服町などの繁華街などがあげられる。

また、現代の都市構造として、戦災・震災復興事業や近年の再開発事業などで整備された、福井駅や南北のシンボルロードの周辺に集積する、業務・商業エリアがあげられる。

ここには、県庁・市役所を始めとする充実した行政機能、シンボルロードに沿って続く民間業務機能、中央１丁目周辺の商業機能、片町地区を中心とする娯楽・飲食機能が、半径数百メートル以内にコンパクトに集積している。

○中央大通りの変遷

1965 年

1963 年の大名町交差点

1994 年

中央大通りは、戦災復興土地区画整理事業により、城下町特有の屈曲した道路から直線化され、防火と交通渋滞に備えた広幅員道路へと整備された。中央大通りの 4 列の街路樹は、当時、大名町交差点にあったロータリーへと続き、福井の顔としての景観を形成していた。

現在の中央大通りは、街路樹が減少し、屋外広告物等が目立つまちなみ景観となっている。

2011 年

出典：福井市

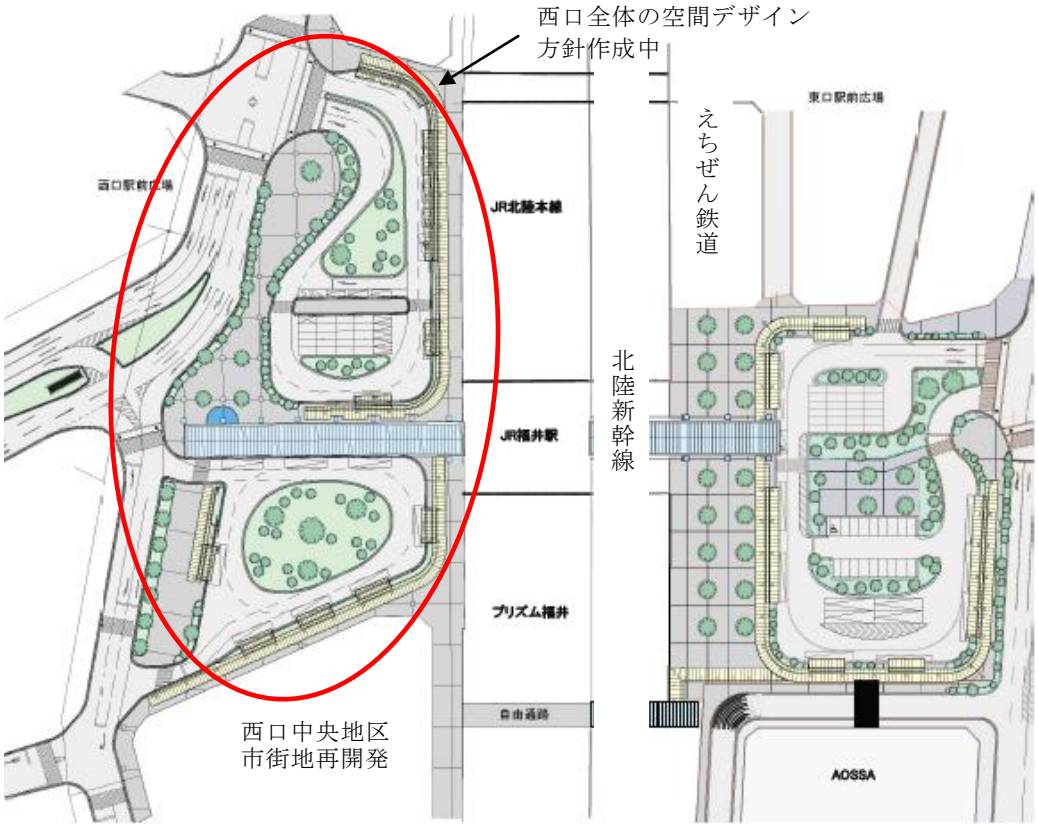
○広域公共交通の状況

現状の福井駅東西広場

西口広場

東口広場

駅前広場配置図（案）



※福井市県都活性化対策特別委員会説明資料（H19）を基に事務局で作成

福井駅東口交通広場は、H21 に供用開始され、高速バスや観光バスが集約されている。

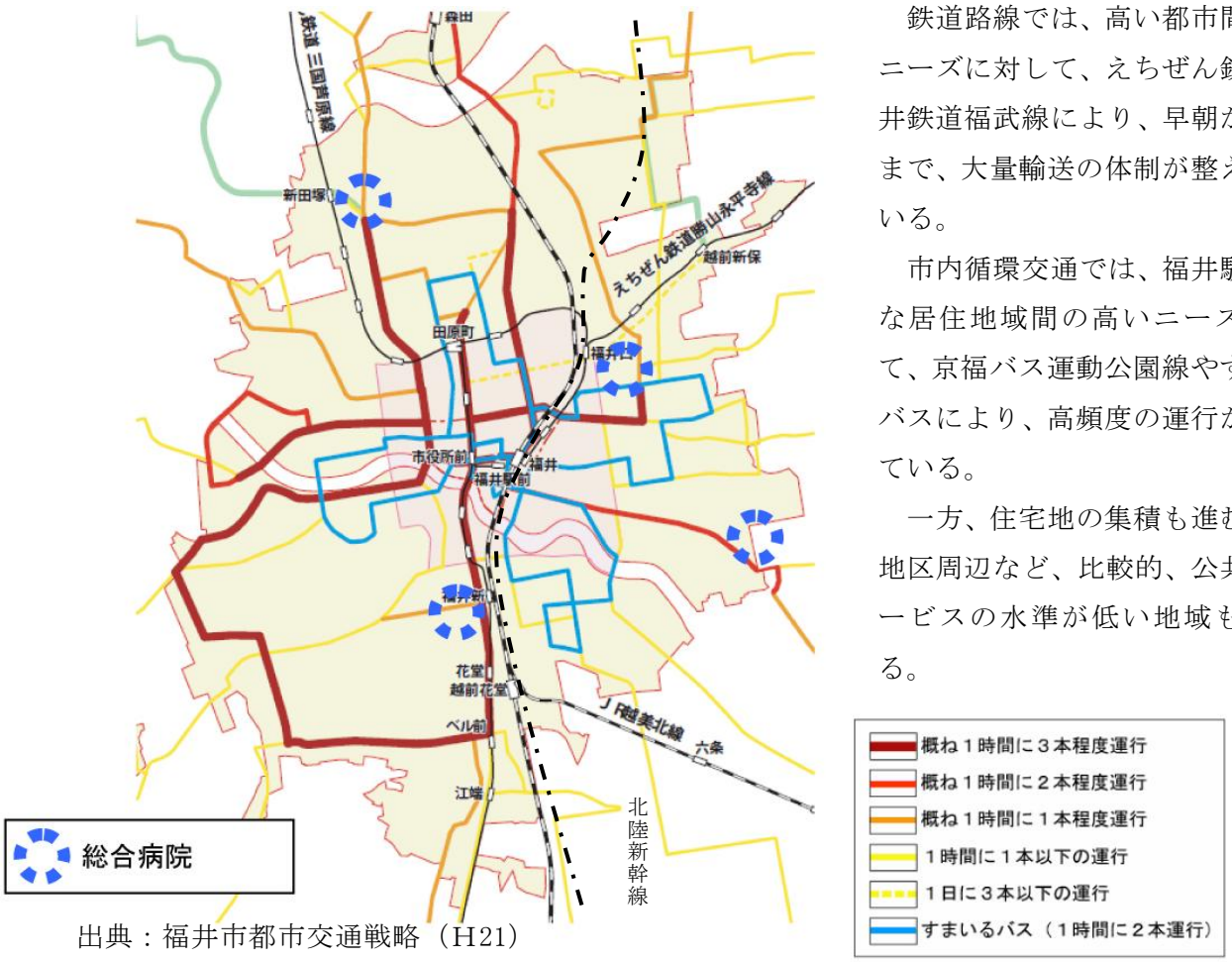
今後、西口交通広場には、路線バスのターミナル機能が整備され、福井鉄道福武線が延伸することにより、県内外の交通結節機能が向上する。福井市では、今年度、西口全体の空間デザイン方針を作成する。

また、2025 年度の北陸新幹線敦賀開業が決定し、県外との高速交通体系の整備が進められる。

北陸新幹線と地域鉄道の位置関係

※二重線が高架化整備箇所

市内の公共交通の現状



出典：福井市都市交通戦略（H21）

鉄道路線では、高い都市間交通のニーズに対して、えちぜん鉄道や福井鉄道福武線により、早朝から夜間まで、大量輸送の体制が整えられている。

市内循環交通では、福井駅と主要な居住地域間の高いニーズに対して、京福バス運動公園線やすまいるバスにより、高頻度の運行がなされている。

一方、住宅地の集積も進む大和田地区周辺など、比較的、公共交通サービスの水準が低い地域も存在する。

（３）まちなかの自然と水辺、足羽山・足羽川

○まちなか地区にある水と緑

足羽山、中央公園と福井城址、養浩館庭園と御泉水公園が緑の拠点に、足羽川が水と緑の軸となっているものの、全体的なボリュームとつながりに欠ける。

足羽川と足羽山の眺望

足羽山展望台から市街地の眺望

福井城址の景観

愛宕坂の景観

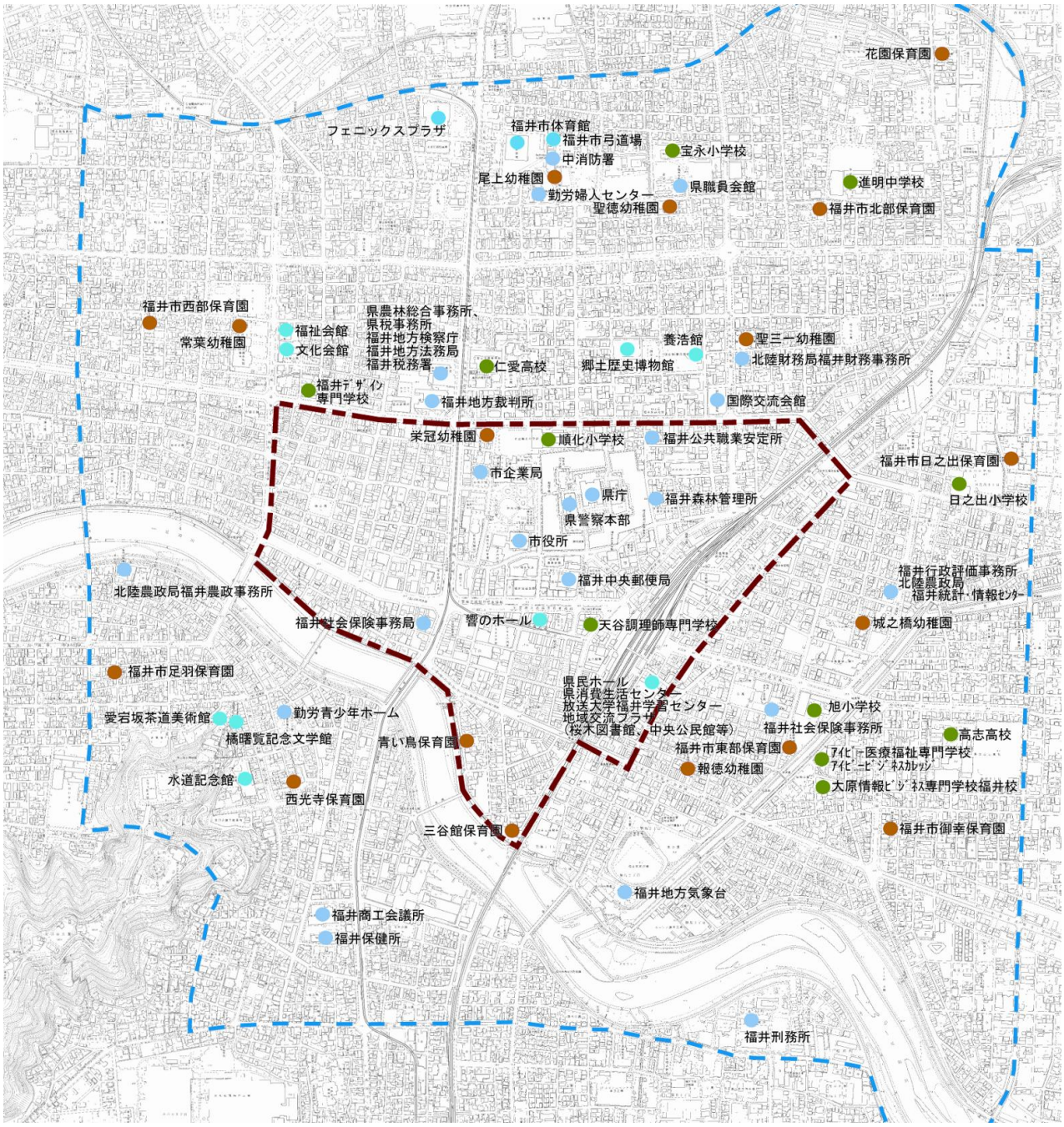
○各都市との都市公園等の整備状況（H21）

	福井市	金沢市	富山市
都市公園面積	340ha	529ha	583ha
対都市計画区域面積割合	1.66%	2.37%	1.7%

出典：国土交通省「都市公園データベース」

【参考】

○福井市中心部の公共公益施設



出典：H18 福井市中心市街地活性化基本計画策定委員会資料

凡　例

- 文化・スポーツ施設
- 教育施設（学校、専門学校等）
- 教育施設（幼稚園、保育園）
- 行政施設（事務所等）
- 現行中心市街地
- にぎわい交流拠点

福井公共職業安定所は 2011 年に福井市開発に移転
アイビービジネスカッレジは、大原学園福井校として
2011 年に福井市大手に移転

○福井駅周辺における主要な事業

福井駅西口地下駐車場整備事業

自走式地下２層、駐車台数：200 台
（H13～H19 年度）

三の丸地区第一種市街地再開発事業

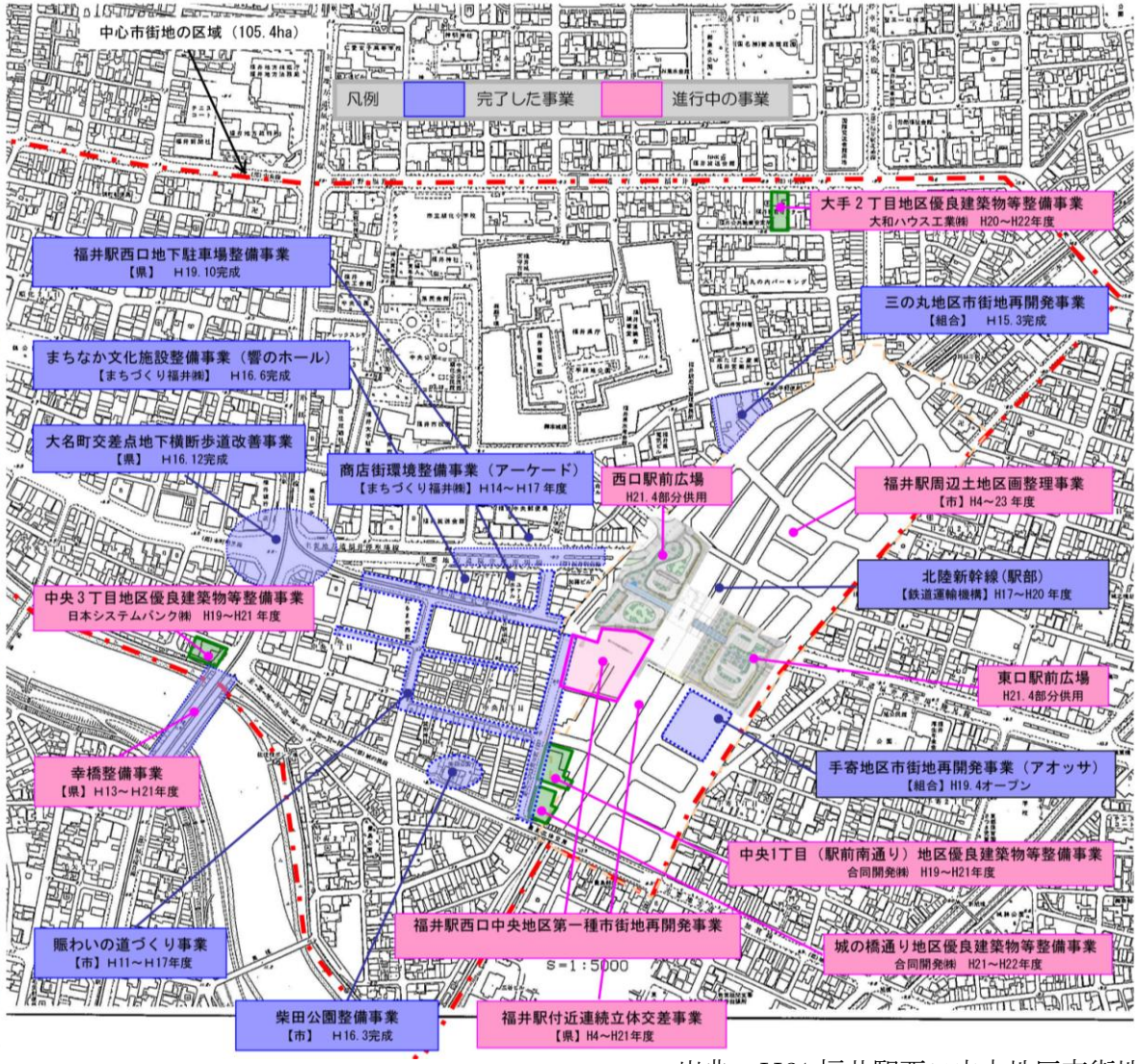
敷地面積：2,800 ㎡、延床面積：20,500 ㎡、
用途：医療福祉施設・分譲住宅等

幸橋整備事業

橋梁整備延長 570m、幅員 36m
橋梁本体 H20 年度完成

賑わいの道づくり事業

市道中央 1-330 号線他
電線地中化、コミュニティ道路化等



北陸新幹線　福井駅部

福井駅部高架部　L=800m

商店街環境整備事業（アーケード等）

中央１丁目等各商店街のアーケード街路灯、
モニュメント、融雪施設の整備

福井駅付近連続立体交差事業

高架延長：約 6.0 km
H17.4 北陸線高架開業、プリズム開業

手寄地区第一種市街地再開発事業

敷地面積：4,500 ㎡、延床面積 33,170 ㎡、
用途：公共公益施設・商業施設等
（H14～H18 年度）

出典：H21 福井駅西口中央地区市街地再開発事業委員会資料

福井市では、平成 19 年度に中心市街地活性化基本計画を策定し、「訪れやすい環境をつくる」、「居住する人を増やす」、「歩いてみたくなる魅力を高める」の３分野で目標を設定し、コンパクトなまちづくりを目指した取り組みを進めている。